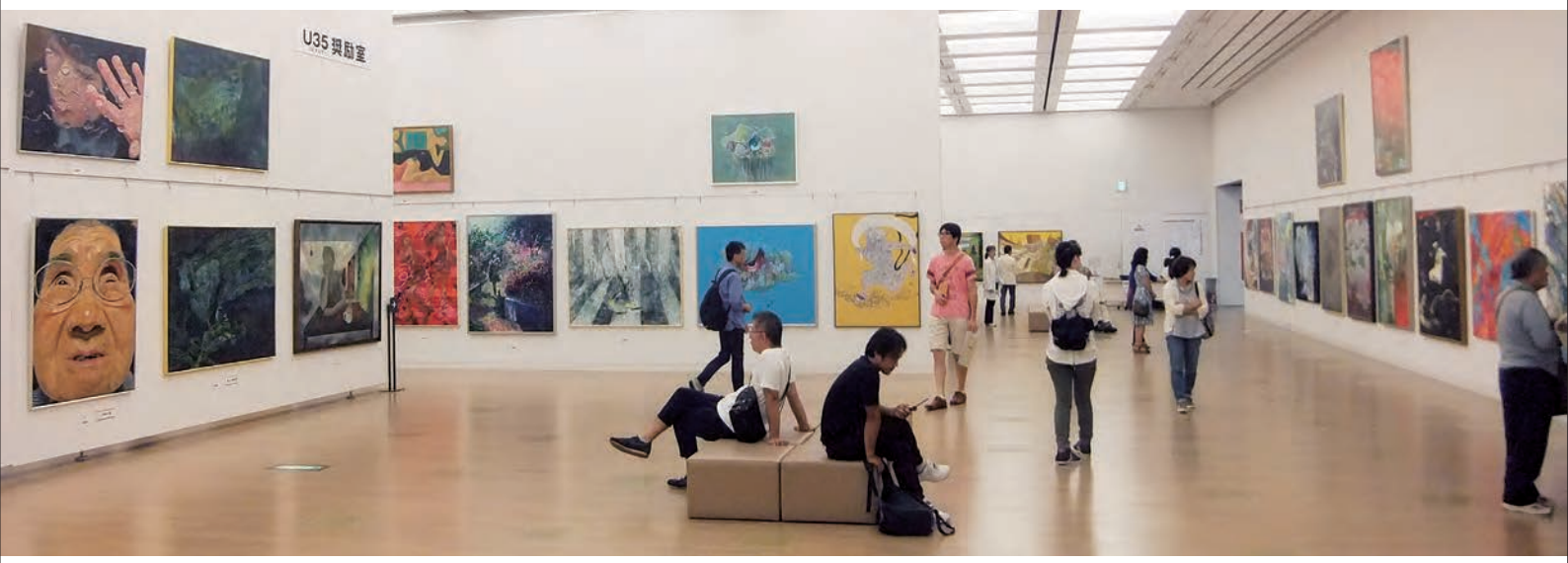
No.72　contents

2　第102回二科展総評
3　〈絵画〉絵画部審査について　受賞作品
4　〈絵画〉受賞作品―制作の視点　受賞者一覧
5　〈絵画〉新会員紹介
6　〈絵画〉102回展会場から―私の選ぶ作品寸評
8　〈彫刻〉総評　新会員紹介　受賞作品寸評
9　〈彫刻〉受賞作品―制作の視点　受賞作品寸評
11　パリ賞・ローマ賞 研修報告
12　event memo（オープニングセレモニー・授賞式・懇親会・作品研究会
　　ギャラリートーク・ナイトミュージアム・コラボ展示）
14　被災地生徒作品特別展示　二科ショップ・チャリティー報告
　　第102回二科巡回展 日程　2018春季二科展 選抜出品予定者
15　〈写真部・デザイン部〉総評
16　出品規約変更のご注意　訃報　トピックス　2018春季二科展 日程
　　事務局だより　編集後記

二科

秋季

発行人：田中 良　発行：公益社団法人 二科会
http://www/nika.or.jp/　TEL：03-3354-6646
E-mail：nika@nika.or.jp



102ND NIKA ART EXHIBITION 2017

第102回二科展総評

田中　良

絵画部会員　審査室にて

複雑な空模様下に、第102回二科展が華々しく国立新美術館で開催された。

今日の日本の美術団体展は、何れも出品者がやや減少の傾向にあるようだが、当会も例外ではなく、多少影響はあったが、質が向上しているのが目立った。

絵画、彫刻、デザイン、写真の四部とも、会員、会友の頑張り、陳列の妙を発揮されたことにより、会場の効果も良好で、一般観覧者の評価もよかった。連日奮闘された会員の皆様、事務局に深く感謝致します。

入選作をみると、会の方針である若手の育成への努力が少しずつ効果を上げてきた。佳作が陳列出来たことが何よりも証明できる。

出品者の勉強の場として、初日開催の作品研究会、来場者に対する啓蒙、サービスとしてのコラボ展示、金曜日のミニコンサート等々、会員が各々の分担で連日奮闘されている様に心からお礼を申し上げる。

又被災地支援として、熊本の高校生の大壁画制作へ、九州の理事・監事・支部長、関西から宮村理事、東京から塙事務局長が応援に行き、見事な風景の大作を完成させ当展に陳列出来たことは、大きな喜びであり、観覧者にも感動を与えることが出来たと思う。

最近の傾向として、年々外国人の来場者が多くなって来た。今後は我々の仕事が一層国際的にも大いに広がりをみせてくれることを期待したい。

以上甚だ簡単に感想を述べたが、これは、あくまでも平和な世だから延々と続けられることであって、一度戦争が起きたなら、総てが灰になってしまうのだから、私達は常に平和の鐘を鳴らし続けなければならない。

次回の作品と、ご健康を祈ります。

絵画部会場　第1室

絵画部審査について

―より良い審査を求めて―

山中 宣明

第102回二科展の絵画部審査では、別表のように会友・一般合わせ四千点近い作品を4日間かけ全会員が審査にあたりました。

絵画部では毎年、総会日の部会において審査に関する意見交換の場を設けています。より良い審査を目指し、審査の方向性や審査規約、手順等の改善点の合意を得たうえで審査日を迎えるべく、活発かつ建設的な意見が交わされ、審査に生かされています。今年特に検討された課題や実施された改善点を挙げてみます。

①会員・会友推挙と授賞審査

会員・会友推挙と授賞は、優劣ではなく違う観点から審査することを徹底しました。法人の構成員となる会員・会友は定款上作品の評価だけでなく、会に貢献する人格や健康も問われます。全会員より選出された推挙候補について、評議員・支部長から支部での活動状況等について寄せられた意見を基に、理事会が検討・最終承認し決定しました。また特別賞に関しては、候補作の過去の受賞歴を検証し、並べて至近距離でも熟視したうえで、各賞の趣旨にふさわしい作品を全会員の投票により決定しました。本年度より会員推挙との重賞も可としました。

②2点入選選出について

2点入選は単に挙手数の多い作品順に選ぶのではなく、最も展示効果のある2点を検討し、慎重に選出しました。

③二次審査

二次審査において入選した作品は、次年度への奨励の観点から80号以下の作品を選出しました。

④受賞候補の公平性

推薦された人だけが賞候補になるのではなく、一次入選者はもれなく賞候補の是非をはかります。

⑤上限6点について

103回より出品点数を6点までとします。出品制限が目的ではなく、密度の濃い丁寧な審査にするためです。

⑥将来性や特異な個性

公平な作品本位の審査を旨とし、挙手制度を貫いていますが、荒削りで技術不足であっても将来性ある作品や特異な魅力ある作品も見逃さないようにしています。

⑦大臣賞等の審査

審査5日目の大臣賞・都知事賞・会員賞審査は、理事と委嘱審査員2名により、作品討議の上、投票で決定しました。東京都職員が審査に立ち会い、終了後大変公平な審査方法である旨の評価をいただいたことを報告させていただきます。

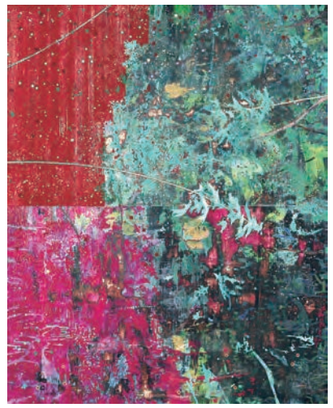
最後に

完全無欠な審査方法はなく、常により良い審査を求め、会員全員で改善努力をしていきたいと思います。

受賞作品

■上野の森美術館奨励賞
ガラスのりんごNo.2　F100　上田 有見子

■パリ賞　晚秋の朝　F100　清水 英子



■二科賞　forest scene 02　F100
山岡 明日香

■二科新人賞　追想　F80　上村 咲弥

■損保ジャパン日本興亜美術財団賞
Digital Cat Ⅰ　F100　日比野 恵美

受賞作品――制作の視点

■内閣総理大臣賞　時空の女神　F200　塙　珠世

■東京都知事賞　僕THINK　172×260.6　田浦 哲也

内閣総理大臣賞　塙 珠世

時空とは、時間と空間が互いに関連し合う宇宙のことを言う。その広大無限に広がる宇宙に思いを馳せる。

「時空の女神」により限られた生命が永遠となる時の心象風景。想いを込めて表現した。そのような時を与えられていることに感謝して。

東京都知事賞　田浦 哲也

「僕THINK」は、「ポクシング」の言葉あそびで、2つの意味やイメージをごちゃ混ぜにしたダブルミーニング（ブルースの歌詞から学んだ）の絵画です。このことによって、意味が重層化したり、変質したり、場合によっては意味がなくなったりします。このような〝誤用された意味〟は、時として無意識の本質を暴き出します。

第102回二科展　受賞者

内閣総理大臣賞　塙　珠世（東京）

文部科学大臣賞　佐々木　至（神奈川）

東京都知事賞　田浦　哲也（福岡）

（絵画部）

二科賞
山岡　明日香（滋賀）

パリ賞
清水　英子（東京）

損保ジャパン日本興亜美術財団賞
日比野　恵美（愛知）

上野の森美術館奨励賞
上田　有見子（大阪）

会員賞
加藤　ひとみ（千葉）
小林　豊弘（神奈川）
茶谷　弥宏（石川）
山崎　美恵子（佐賀）
吉田　清光（神奈川）

会友賞
青木　洋子（福岡）
吾田　弘子（神奈川）
石川　由巳子（宮城）
今村　恵利子（熊本）
大槻　薫（茨城）
小川　幸男（福岡）
工藤　絵里子（埼玉）
小林　君代（群馬）
佐々木　実（岩手）
髙橋　和平（宮崎）
富秋　和子（神奈川）
平林　直哉（鹿児島）
水元　美穂子（京都）
牟田　志津子（福岡）
吉田　紗知（千葉）
渡邊　仁美（神奈川）

特選
石川　篤司（大阪）
猪立山　三鈴（福岡）
小野寺　さゆり（宮城）
川島　理智子（熊本）
木村　隆行（愛知）
黒川　壽子（千葉）
佐々木　邦枝（東京）
佐治　登茂子（福島）
杉本　恵理（三重）
髙橋　さち（千葉）
武部　美智子（青森）
筒井　通子（奈良）
中　三保子（北海道）
中野　誠（鹿児島）
野田　喜美代（滋賀）
畑中　良二（宮城）
望月　強（埼玉）
横山　杏子（新潟）

二科新人賞
上村　咲弥（千葉）

新人奨励賞
朝比　智美（三重）
道上　恵美（和歌山）

会員推挙
大岩　万里子（東京）
大島　信人（愛知）
太田　京子（群馬）
小田島　えい子（神奈川）
熊田　奈穂子（千葉）
酒井　とし子（埼玉）
嶋田　みどり（東京）
徳永　スエ子（愛知）
中　静江（石川）
野平　智広（鹿児島）
山岡　明日香（滋賀）
山下　かじん（長崎）

会友推挙
遠藤　学（千葉）
加持　友子（滋賀）
木村　民治（千葉）
後藤　寿美子（熊本）
清水　英子（東京）
田中　とも恵（和歌山）
田上　俊一（熊本）
中田　登（北海道）
中村　百合江（東京）
中山　かほり（和歌山）
野久保　由美子（東京）
長谷川　晴香（京都）
星野　千鶴子（埼玉）
前橋　伸哉（東京）
水沢　道子（愛知）
三津川　好則（滋賀）
宮本　恵美子（岩手）
矢島　和子（神奈川）
安　新治（茨城）
康本　節子（大阪）
柳澤　綾子（京都）
若狭　洋子（滋賀）

（彫刻部）

二科賞
稲葉　朗（東京）

ローマ賞
橋本　和明（和歌山）

彫刻の森美術館奨励賞
坂本　絢佳（山形）

会員賞
豊田　晴彦（神奈川）
長谷川　大治郎（石川）

会友賞
藤田　明美（神奈川）
吉田　朋世（奈良）

特選
井上　幸夫（群馬）
カツノ　ユキコ（東京）
与島　雪（富山）

新人奨励賞
西澤　桂（長野）

会員推挙
川本　拓（神奈川）
山田　美智子（神奈川）

会友推挙
荻野　弘一（新潟）
カツノ　ユキコ（東京）
浜田　修子（東京）

絵画部　新会員紹介

夜明けの埠頭

大岩 万里子

色遊びを繰り返し、思い描いた景色や気持ちを楽しみます。色と形が響きあう面白さを探求しています。

第79回　特選／第85回　会友推挙
第100回　会友賞／第102回　会員推挙

たいら―c

大島 信人

画面の中だけの対話ではなく、同時に壁面を超え空間も巻き込む「高い次元」での響きを重視した表現でありたい。

第80回　パリ賞／第85回　会友推挙
第94回　会友賞／第102回　会員推挙

景2

太田 京子

身近な生活の中に、今、掴める感覚を頼りに描いています。

第87回　特選／第93回　会友推挙
第95回　会友賞／第102回　会員推挙

風の記憶

小田島 えい子

二科50回展より出品し続け53年の月日が経ちました。少しずつ自由な世界に挑戦し続けたいと念じます。

第71回　特選／第73回　会友推挙
第79回　会友賞／第102回　会員推挙

流・ホタル

熊田 奈穂子

真を描くに当たり哲学、現況、心境を駆使してます。制作は等身大の自分を映し出す鏡だと思っています。

第89回　上野の森美術館奨励賞
第92回　会友推挙／第99回　会友賞
2015春季二科賞
第101回　損保ジャパン日本興亜美術財団賞
第102回　会員推挙

人・かたち（I）

酒井 とし子

ずっと、人物画です。具象から現在は平面の抽象画ですが色彩よりもL字空間の処理に苦労する毎日です。

第87回　特選／第88回　会友推挙
第94回　会友賞／第102回　会員推挙

心の残響―生命Ⅲ

嶋田 みどり

絵を描く時間は至福の時です。地球の大自然とつながっている球根の生命力その姿を追い続けていきます。

第88回　特選／第89回　会友推挙
第94回　会友賞／第102回　会員推挙

おひと（矢作ダム）3

徳永 スエ子

ダムで沈んだ里の輝かしい日々、屋敷の石垣、路傍の石仏、蔵、信心深く凜としたお人。鄙びた空事を描きたい。

第83回　特選／第93回　会友推挙
第95回　会友賞／第102回　会員推挙

季環―B

中　静江

絵の具を塗り重ねていくと人物の顔がみえてくる。そこから感じる想いを大切に描いていきたい。

第83回　安田火災美術財団奨励賞
第87回　会友推挙／第91回　会友賞
第102回　会員推挙

僕の姿を君の未来に

野平 智広

教室にいる動物と女性。互いに響き合うことで物語が始まる。そんな瞬間をイメージして制作しています。

第98回　特選／第99回　会友推挙
第100回　会友賞／第102回　会員推挙

forest scene 02

山岡 明日香

目に見える風景の要素を汲み、画面へと定着させる時に、感情に響くリアリティも描ければと考えています。

第94回　特選／第95回　会友推挙
第98回　損保ジャパン美術財団賞
第102回　二科賞・会員推挙

云

山下 かじん

工業用塗料の強さと輝きに、現代性と可能性を求め、ドローイングの生々しさと美意識のフォルム化を追求。

第94回　上野の森美術館奨励賞
第95回　損保ジャパン美術財団奨励賞・会友推挙／第96回　会友賞
第100回　二科賞／第102回　会員推挙

102回展会場から――私の選ぶ作品寸評

野平 智広　僕の姿を君の未来に
F100

野平智広

共存しているはずの動物たちが、様々な大きさに変化してありふれた日常の中に、ありえない形で紛れ込んでいる。自然のバランスが壊れかけているのかもしれない。このような不安を未来へのメッセージとして、嫌味のない堅実な写実力でさりげなく見事に表現している。（田浦 哲也）

村山 成夫　色はにほへど(転)
F100

村山成夫

枯れていく花に美を感じる作者は、死を意識することで生とどう向き合っていくか、生をどのように輝かせるかをテーマにしているように思われる。魅力あふれる繊細な表現力を持つ作者が、「どのように描くか」はもちろん、更に「何を描くのか」今後の展開に期待したい。（田浦 哲也）

寺田 秀子　歩む　F100

寺田秀子

ただ静かな、目立った表現を使わないこの絵に惹かれた。丁寧につくられた絵肌を流れる筆跡とデフォルメされた人体が、不思議な構図の上で観る者の心をくすぐるように調和する。抗って成るがままに歩む強い生が抑制された色彩のなかでじわりと湧きあがるようだ。（番匠 美晴）

朝倉 由美　17生きるⅣ　F100

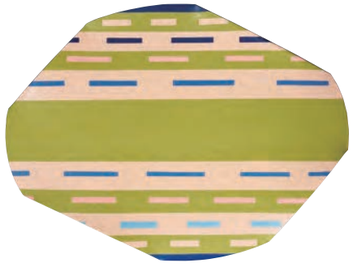
朝倉由美

カメラのレンズを引くように遠い視点で作品を見直した時、柔らかな色彩と気配としての人体が浮かび上がりハッとした。人体に込められた真摯な思いが心を打つ。舞い上がり、紡ぎ合う黒い曲線と強い赤の色彩が生きる証としてどう変化していくのか楽しみに思う。（番匠 美晴）

奥山 嘉男　マテーラⅡ　F100

奥山嘉男

陽光を浴びた山岳都市から生命を見出す事はできません。目を凝らすと階段を昇り降りする人々の足音が聞こえてきます。戸扉の向こう側から家族団欒の話し声が聞こえてきます。この街が脈々と生き続けている、深層表現に感嘆しました。（濱田 進）



池田 うえもん　緑の地球の雲　P60

池田うえもん

この物体は何なのか？疑問を投げ掛けてきます。目を凝らすと凹凸は地球に見えてきます。又隕石にも見えてきます。壁面から離れて部屋を舞う雲にも見えてきます。見るものの想像を駆り立てる不思議な形態に、新しい風を予感する事ができます。（濱田 進）

102回展会場から――私の選ぶ作品寸評

中田　登　ART in ART 17.1
F100

中田登

ブルーで統一表現された空間は、もはやアトリエでは無く時が刻々と刻まれている異次元の空間を生み出しています。花の妖精がそこに潜み、見るものをその空間に引き込む不思議な力を感じとる事ができます。（濱田 進）

室永佳絵　地のことばNo.2
F100

室永佳絵

一瞬ステンドグラスの中に身を置いたかのような強いインパクトを与えながらも敬虔な静けさを醸し出している。大らかなフォルムと撫でるような筆致の絵肌が伸びやかな空気感を放って観る者の想像力に挑んでくるようだ。黄土と白の用い方が美しい。（番匠 美晴）

冨田　雪　ヴェネツィアカーニバルにて
F100

冨田雪

夜のヴェネツィアの運河を仮装した人々が行き交う旅の思い出かと思いきや、よく見ればそこにいるのは人々ではなく動物達、空想の世界が広がっている。初出品ながら、心和む温もりのある作品。この持ち味を大切にして、発想の面白さを追究して下さい。（大渕 万弥子）

橋本則子　街(1)　F100

橋本則子

単なる平塗りでなく微妙な色の差の重ね塗りに、作者のもうすこしもうすこしという自分の求めているものに近づこうとする意志が感じられる。それはのびやかなタッチもおなじ。ユーモラスにも不気味にも見えるフォルムが緑色と紫色で描かれ、にんまりしてしまう。（齋藤 賢司）

増田　亨　覚醒　F80

増田亨

ナイフを思い切りよく、筆も大胆に繊細に使いこなし、一見ガラクタのばらまきのように見えるが、そこかしこにイメージをわきださせるフォルムがかくれていて、見あきない。白いネコが前足でなにか虫のようなものをつかまえているなど、細部も意外と心配りしている。（齋藤賢司）

宮井啓江　道と人　F100

宮井啓江

白を基調とした背景に、デフォルメした人物が繊細な線で描かれ、流れるようなリズムを作り出している。人物の表情に内奥を見て取れ、心惹かれた。今後更に画面構成を研究され、主題の魅力を一層引き出して下さい。（大渕 万弥子）

彫刻部　総評

島田 紘一呂

第102回二科展が9月6日から18日まで、国立新美術館において開催され、今年は9月に入ってからの開催だったので、例年よりも少し秋を感じさせるスタートとなりました。彫刻部の展示室は、評判が良かった前年度と同じようにパネルで仕切りました。作品展示は、同じ材質の作品や受賞作品などが一か所に集まらない様に配置し、毎年同じ作家の作品が、同じ場所に固定されマンネリ化しないように心掛けました。

彫刻展示室を入場口から作品を鑑賞していきますと、第1室では空間の広がりを感じる中、若くて大いに張り切った作品が目にとまります。さらに2室、3室、4室へと進むと、二科色とも言うのであろうか穏やかな空気の中、木彫、金属、ブロンズ、石膏など様々な材質で、異なる作風の作品群が展示されています。そして、5室まで進むと広いスペースに大作がゆったりと落ち着いた空間を構成しています。

野外展示場へと向かう途中にある休憩室は、今年で3回目を迎えたコラボ展示スペースになっています。絵画、彫刻、デザイン、写真の4部門の会員が参加の企画で、今回はネコ、イヌ、花をテーマにしています。今年から新しい企画としてミニ個展を4か所に設置するなど、毎年展示に工夫を加えています。その結果、コラボ展示は来場者に喜ばれ二科展の新たな魅力となりつつあります。

さて、野外展示場に出ますとやはり石彫がほとんどを占めています。夜の照明で照らし出される作品、雨にぬれ、色が濃くなった石彫、太陽の下の熱い手触り等、野外には室内とは違う魅力が満ちています。

振り返れば、重厚感はあるが少々狭かった旧東京都美術館から、開放的な、明るく広いスペースの国立新美術館に移ってきて、いかにより良い会場展示が出来るか全員で知恵を絞り、試行を繰り返し、今の展示構成にたどり着きました。他団体からも、良い展示会場だとお褒めの言葉も聞えて来る様になったのは、二科会として喜ばしい事です。

彫刻部　集合写真

受賞作品寸評

彫刻部で、二科賞を出すのは久しぶりのことである。

二科賞　TRICK　稲葉　朗

今年度の二科を代表する重さが選考に慎重さを与える。

作品に向かい合うと一瞬重量バランスに違和感を覚えるだろう、彼の作風のトリックだ。

左足をスライス状にずらせ重さを消してゆく、形の動きの中に時間を取入れる試みがなされ、成功している。若い世代の新しい取り組みに大いに期待したい。

（島田 紘一呂）

彫刻部 新会員紹介

川本　拓

生命とは個体だと思っていた。何か一つの形であらわそうと思っていた。作り続けていくうちに生命とは流れなんだと感じた。その上に浮かぶものが植物であり動物であり人なんだと。

これからも魂をこめて納得のいく制作をしていきたいと思います。

山田 美智子

見上げた空の美しさ、目の前を走り返る子供たち、繰り返し思い出す言葉。自然や人のいとなみのなかに存在する真実のようなものに触れたとき、心が震え、制作意欲が湧きあがります。その感動を澄んだ想いのまま、形に残せる彫刻家でありたいと願っています。

文部科学大臣賞　ジャックの場合は　佐々木　至

ローマ賞　Kanon―時を渡る　橋本 和明

受賞作品
――制作の視点

文部科学大臣賞　佐々木　至

数物の制作で、自己を無にと努めた事が作用したのか、指の数センチ先で作品が出来てしまった気がする。自信の無い自分の背中を、唯一押してくれる疲労感さえいつもと異う、初めての感覚である。迷路の中に居た様な、そんな奇妙な夏が終わった。

ローマ賞　橋本 和明

ひりひりと心の奥で消えぬ傷みを、人間の存在の強さと儚さを、そうした諸々の感覚を粘土でかたちの中に封じ込めようと制作して来た。愚直に繰り返し造り求めて行く。自らの思索の過程を明らかにする。僕に残された彫刻の方法「Kanon」の展開は、ここにしか無いように思う。

会員賞　Hush-A-Bye（ハッシュ アバイ）　豊田 晴彦

会員賞　鳥のうたと空間
長谷川 大治郎

彫刻の森美術館奨励賞　口から出たもの
坂本 絢佳

会員賞　豊田 晴彦

今回はデッサン・マケットに時間をかけ、本当に自分は何を表現したいのか、熟成するのを待ちました。本制作ではお決まりの工程に拘わらず思わぬ発見を大事にしました。評価された事を喜びながらも技術に溺れず素材に媚びず制作し続けたいと思います。

会員賞　長谷川 大治郎

時の流れは記憶の中に在る時と違って、肉体は滅び、精神だけが残る、今、確かに、若い頃に軽く想っていた事柄が現実となった。一歩づつ、未来に向かって、想いを新たにして、制作し続けたいと思う。

受賞作品寸評

彫刻の森美術館奨励賞　坂本 絢佳

作品「口からでたもの」は実際には目には見えない言葉や声が、空中にさまよう様を現実の形体として表現している。しかも不確かな対象には不向きな感じのする硬質な花崗岩を極限の細さまで絞り込んで、自らが思い描く形に変換できたことに確かな造形力を感じる。

（前田 耕成）

特選　娘　井上 幸夫

会友賞　ロバ　吉田 朋世

会友賞　ベトザタの池　藤田 明美

会友賞　藤田 明美

流木を、紡ぐ様に繋いだ半身三体の作品。上体の朧気なことで、動きや関係性に想像がふくらむ。繊細さと大胆な表現の攻防も外連味を感じさせない。異種素材の表わす物は、癒しか、絶望か、畏敬への標榜か。模索を楽しんでほしい。

（佐々木　至）

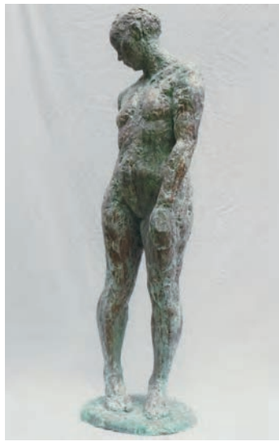
会友賞　吉田 朋世

展示会場中央壁側に「ちょん」と清まして台座に乗っかるイヌの様な動物が見える。側に近寄りよく見ると、紛れもなくロバなのである。滑稽かもしれない、しかも饒舌なのかもしれない。そして端正でもある。否、その姿からは遠く離れた『女神』なんだろう。妙な事を言って仕舞ったが、その凛とした強固なる作品の姿が述べさせたのだ。（小田 信夫）

特選　井上 幸夫

110cm程の小作品であるが、丁寧に彫り進め、見応えのある仕上がりになっている。木地と着色された部分が程良いバランスをとっており全体の統一感を感じさせるのだが台座にも意識が注がれるべき。対象に対する愛情と完成度の高さから静かな気品が感じられる。

（嶋崎　達哉）



新人奨励賞　杜　西澤　桂

特選　シェア　与島　雪

特選　inside　カツノ ユキコ

特選　カツノユキコ

さまざまな大きさの方形の欅材を集積し削り込むという独特な手法で制作された作品は、数本の足でその量塊を地上から浮かび上がらせる。削り込まれた曲面の形と集積のまま残された形とのバランスが課題か…。

作者独自の造型作法を遵守しつつ、新たな展開に期待する。

（橋本 和明）

特選　与島 雪

書物の世界に静かに沈潜する一人と一匹。わずかに重ねた親指に、心の起伏が現れている。素材に向う素直な気持ちがもたらす暖かさと同時にユーモアを兼ね備えたところが作者の持ち味なのだろう。まっすぐな造形への探求が、その魅力を強固なものにする。

（二ノ宮 裕子）

新人奨励賞　西澤 桂

「杜」と題された立像は、静かで、豊かな時間を感じさせる誠実な作品です。一瞬、フと足元を見る動作がポーズの源です。小さな破綻も幾つかあるが、若い作者は、旺盛な吸収力を発揮して、この先自らの足元を確かめつつ、多くの発見を重ねていくだろう。

（鷲崎　直子）

パリ賞　研修報告

オーベル・シュル・オワーズを訪ねて

石川 由巳子

（第101回展　パリ賞）

2017年8月5日、私の大好きな画家ゴッホが、亡くなるまでの70日間を過ごした小さな村、オーベル・シュル・オワーズを訪問してきました。

パリから北西に30㎞、セーヌ川の支流オワーズ川沿いにあるこの村には、雄大な空、どこまでも続く地平線、そしてゆったりとした田園風景が広がっていました。ゴッホを惹きつけてやまない魅力と平穏さがそのまま残っている村でした。

ゴッホが下宿していたラブー亭の裏階段を上がっていくと、ゴッホが使用していた家具付きの部屋が当時のままに保存されていました。天窓が一つの閑散とした小さな部屋で、ゴッホをもっと知りたいと、思わず壁に手を触れた時、127年前とシンクロしたかのように、ゴッホの繊細な心情に触れたような気がしました。

ガイドさんの説明がフランス語訛りの英語で、理解するのが困難でしたが、ゴッホの死因については、聞き取ることができました。一般的にピストル自殺と言われているものの、そのピストルが発見されていないことから、他殺説も考えられるとのことでした。ゴッホに他殺説があることはもちろん知っていましたが、ラブー亭のガイドから説明をうけると、信憑性が深まり、真相は何なのかと、ゴッホのミステリアスな部分が一層気になるようになりました。

そして、作品となったオーベル協会、村役場を見学し、ゴッホと弟のテオが並んで眠るお墓に行きました。とても仲が良い兄弟であり、天才画家と画商でもあったので、ツタが絡まり、ひまわりと麦が添えられているお墓の前に立つと、とても感慨深いものがありました。

翌日、オルセー美術館で「オーベル協会」、「ガシェ医師の肖像」、「自画像」など多数の作品を鑑賞し、ゴッホの偉大さにひれ伏す気分になりました。

ゴッホの絵を継承した画家は未だなく、新しい時代へつないだ画家もいなく、自立し孤立した絵画の闘士としての迫力を痛感しました。

ハードスケジュールの中、フランス北西の港町オンフルールではスケッチをし、ルーブル美術館やベルサイユ宮殿でも美を満喫してまいりました。

この研修旅行では、ゴッホの繊細な心情に触れることができたのと同時に、絵画上の個性の確立を目指すべく次のステージへの指針を感じ取ることができ、私にとって此の上ない財産となりました。

この唯一無二の時間を頂きましたことを心より感謝申し上げます。

ローマ賞　研修報告

山田 將晴

（第101回展　ローマ賞）

34年ぶりのイタリアは、多くの観光客で溢れていた。美しい街並みは当時のままで、大理石の建造物はクリーニング技術が進み、多くが修復を終え本来の輝きを取り戻していた。

5月下旬からヴェネツィア、フィレンツェ、ローマを起点の17日間の研修でした。

ヴェネツィアでは5月中旬からビエンナーレが開催され、街の様々な空間に造形物が展示されていた。広々とした旧造船所と森の会場は、各国パビリオンが作られ、インスタレーションを中心に、巨大造形物が並び、刺激的な展示空間でしたが、ゆったりとした時間が流れていた。

フィレンツェで車をチャーターして、2時間余り走ると車窓から雪山と見間違えるような、白い山肌が目に飛び込んでくる、そこが世界最大の大理石産地カッラーラの石切場だ。今回は特殊な石切場に行ってみた。大理石の山塊にトンネルを掘り入口から約400m、ビアンコ・カッラーラ・ピュアと呼ばれ、叩くとキンキンと金属音が出る良く締まった良質な白い大理石が産出される。縦横16mで柱を残し巨大地下空間の中で採掘されていた。いつか使って見たいと思う。

彫刻ロボット

石切場近くの彫刻工房で彫刻ロボットを見ることが出来た。自動車組立ラインのロボット型でデータを入れると大きな面から小さな面へと、ほぼ原形どおりに出来上がり、後は薄皮をはぐ感じで人の手によって仕上げられる。技術の進歩に驚かされ、少し考えさせられてしまった。

パオリーナ・ボルゲーゼ

ローマのボルゲーゼ美術館では、バロック彫刻の代表的な超絶技巧の作品、ベルニーニの「アポロとダフネ」等を堪能したが、別室にさり気なく置かれたバロック後のアントニオ・カノーバの作品「パオリーナ・ボルゲーゼ」に心を奪われてしまった。（ボルゲーゼ家に嫁いだナポレオンの妹がモデル）、形の簡素化と洗練された美しさと気品、超絶技巧なのだがそれを感じさせない…。

今後の制作の手がかりとなる出会いや方向性を見つめ直す充実した、17日間約120㎞歩き回ったイタリア研修でした。

9月6日　10:00　オープニングセレモニー

左より
一般社団法人二科会写真部 理事長 森井禎紹
公益社団法人二科会 彫刻部代表・常務理事 菅原二郎
ＮＨＫ厚生文化事業団 理事長 鈴木賢一
公益社団法人二科会 理事長 田中 良
国立新美術館 館長 青木 保
一般社団法人二科会デザイン部 理事長 今村昭秀

NIKA 102nd 2017 event memo

9月6日　14:00～　授賞式　3階講堂

絵画部　会員推挙

内閣総理大臣賞　塙 珠世

文部科学大臣賞　佐々木 至

9月6日　18:00～　懇親会　リッツカールトン東京

田中理事長挨拶

和やかに
東北支部連合

9月6日　作品研究会　12:00～14:00　1・2・3階展示室　各会場の担当会員が作品の実践的な講評・研究会を行なった

9月10日　彫刻部ギャラリートーク

二科賞　稲葉朗会友

ローマ賞　橋本和明会員

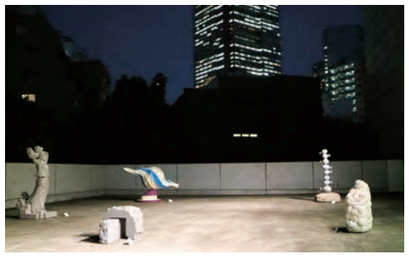
彫刻の森美術館奨励賞　坂本絢佳さん

9月9日・10日・16日・17日　絵画部ギャラリートーク

４名の会員が各自のテーマと視点で、鑑賞や制作の参考となるよう会場作品を案内した

9月9日　堀尾会員　自画像の多様鑑賞、制作性としての絵画
10日　皆川会員　抽象画を楽しもう
16日　浅賀会員　感じるままに
17日　寺田会員　絵を描く喜び

■ 9月8日・15日　ナイトミュージアム　夜8時まで開場



野外彫刻ライトアップ

9月15日　ミニコンサート　アクティニア

第102回二科展コラボ展示

テーマ「ネコ・イヌ・花」

ミニ個展に参加して

絵画部　深見まさ子

今回から4部門各1名ずつのミニ個展が企画され、写真部・天内紀元、デザイン部・高橋貞二、彫刻部・島田紘一呂、絵画部からは私が参加した。犬、猫、花のテーマの中から「花のゆくえ」というタイトルで9点出品。

ミニ個展という事で作品構成に苦労していたところ、デザイン部の方々からてぎわのよい協力を頂き、その事がとても嬉しかった。他の部門の方々と交流できるのもコラボ展示ならではの成果と感じられ、新企画のミニ個展のコーナーが来場者と出品者を繋げる何か新しい風をひき起こすことが出来たとしたら、とても嬉しい。

2000を上回るアンケート回答をいただき、4部門の代表の抽選により、70人の方に出品コラボ作品をお贈りしました。

復興後の熊本 力強く

熊本北高生 アクリル画 二科展（東京）に大作

二科展に展示されている熊本北高生の作品＝13日、東京都港区

熊本北高の生徒24人が熊本地震からの復興を願って描いたアクリル画の大作が、国立新美術館（東京）で開催中の二科展で特別展示されている。雄大な阿蘇を背景に、かつての威容を取り戻した熊本城など、復興後の熊本のイメージを色彩豊かに表現している。

作品は横6・5メートル、縦1・6メートル。澄んだ空の下、噴煙を上げる阿蘇や緑豊かな草原、白川の清らかな流れ、熊本城の天守閣などが、素直なタッチで力強く描かれている。

被災した生徒たちを絵の制作で元気づけようと、美術団体の二科会（東京）が同校に提案。今年3月、美術部員ら当時の1～3年生が制作した。県内外から同校に駆けつけた二科会役員の画家6人が指導、わずか2日間で完成させた。

当時の美術部長田河晴菜さん、副部長の本郷瑛梨さん＝いずれも3年＝は「こんなに大きな絵を描くのは初めて。指導は情熱的で楽しかった。熊本が作品のように復興してほしい」と話した。

指導に当たった一人で、二科会監事の木戸征郎さん(78)＝熊本市＝は「一生懸命描いてくれて感動した。希望や夢を感じさせる作品だ」と語った。

展示は18日まで。会場を訪れた八代市出身の橋本敏さん(69)＝埼玉県＝は「本当に懐かしい。美しい熊本をよく表現できている」と喜んでいた。

（中原功一朗、嶋田昇平）

被災地の生徒作品特別展示について

二科熊本支部支部長　木戸征郎

この度の第102回二科展会場に於きまして、熊本県立熊本北高等学校の美術部員が描いた「熊本・ふるさとの復興、そして発展を」と題した大作を展示させて頂きました。同校及び熊本に関わりのあられる方々をはじめ、全国の多くの方々に御覧頂くことが出来ました。雄大な阿蘇や熊本城が描かれた生徒達の力強い作品に感動し、エネルギーを頂いたとの心暖まるお便りを沢山頂きました。その事を生徒達にもお伝えしました。又、地元では、最も多く購読されている新聞にも大きく掲載され、現在も仮設住宅で生活しておられる多くの方々をはじめ、熊本県民に二科会の支援活動が伝わり感謝されています。会員の先生方に心より厚くお礼申し上げます。

◇二科ショップ

作品集・絵葉書、受賞作品目録に加え、コラボ展示参加作品の目録と絵葉書を販売。併設チャリティーコーナーは、4部門の会員寄贈の多様な作品を展示し、多数の来場の方がお立ち寄り下さいました。

◇チャリティー報告

寄付金総額
771，350円
収益の全額を左記の通り寄付いたしましたことをご報告し、ご協力の皆様に御礼申し上げます。

・NKH厚生文化事業団
500，000円
・熊本県立美術館
271，350円

会員絵葉書セットの絆通信を、福島、熊本の被災の方々にお届けする活動も継続しました。

第102回 二科巡回展

◇東海展
平成29年10月3日～9日
愛知県美術館ギャラリー

◇富山展
平成29年10月18日～22日
富山市民プラザ

◇京都展
平成29年10月24日～29日
京都市美術館

◇大阪展
平成29年10月31日～11月12日
大阪市立美術館

◇広島展
平成30年1月9日～14日
広島県立美術館 県民ギャラリー

◇鹿児島展
平成30年3月10日～18日
鹿児島県歴史資料センター 黎明館

◇福岡展
平成30年3月20日～25日
福岡県立美術館

2018 春季二科展　選抜出品予定者

絵画部
〈会友〉青木 洋子［福岡］
小川 幸男［福岡］
小林 君代［群馬］
工藤絵里子［埼玉］
佐々木 実［岩手］
牟田志津子［福岡］
吾田 弘子［神奈川］
富秋 和子［神奈川］
吉田 紗知［千葉］
水元美穂子［京都］
〈一般〉朝比 智美［三重］
石川 篤司［大阪］
猪立山三鈴［福岡］
上田有見子［大阪］
上村 咲弥［千葉］
小野寺さゆり［宮城］
川島 正［熊本］
川島理智子［熊本］
木村 隆行［愛知］
木村 民治［千葉］
黒川 壽子［千葉］
佐々木邦枝［東京］
佐治登茂子［福島］
清水 英子［東京］
杉本 恵理［三重］
高橋 さち［千葉］
武部美智子［青森］
田中とも恵［和歌山］
田上 俊一［熊本］
筒井 通子［奈良］
中 三保子［北海道］
中田 登［北海道］
中野 誠［鹿児島］
中村百合江［東京］
野久保由美子［東京］
野田喜美代［滋賀］
長谷川晴香［京都］
畑中 良二［宮城］
日比野恵美［愛知］
星野千鶴子［埼玉］
水沢 道子［愛知］
道上 恵美［和歌山］
三津川好則［滋賀］
望月 強［埼玉］
安 新治［茨城］
柳澤 綾子［京都］
横山 杏子［新潟］

彫刻部
〈会友〉稲葉 朗［東京］
藤田 明美［神奈川］
吉田 朋世［奈良］
〈一般〉井上 幸夫［群馬］
カツノユキコ［東京］
坂本 絢佳［山形］
西澤 桂［長野］
与島 雪［富山］

写真の魅力を楽しむ展覧会

一般社団法人二科会写真部　理事長　森井 禎紹

第102回二科展は、盛況裡に終了することができました。第65回二科会写真部展会場にも例年通り連日多数の来場者があり、1300点以上の膨大な展示作品一点一点を丁寧に鑑賞していただきました。ただただ感謝する次第です。

写真部の一般公募は、例年3月に応募作品の受付を行い、4月の一次審査で入選内定作品を選び、6月に二次審査を行って入賞・入選作品を決定します。3月に応募された作品が、半年を経て国立新美術館で展示されます。この間、多くの方々が展覧会開催へ向けた作業にかかわり準備します。こうした準備作業は、二科展における写真展として気持ちよく鑑賞していただくために必要な工程だと考えています。

写真はカメラを使って表現しますが、最近のカメラはますます高性能になり、いろいろな機能が付いています。この機能を駆使して写真独自の様々な表現で、多様な作品が生まれます。ですから写真展での鑑賞者の興味も、写っている被写体に対する関心、カメラやレンズの機能をいかに駆使して描写しているかに対する関心、そしてフレーミングやシャッターチャンスなど撮影テクニックに対する関心など様々です。二科会写真部展は、今後も写真の魅力を追求し、その作品を十分に楽しんでいただける展覧会でありたいと思っています。

4部コラボ展示は今回が3回目で、写真部会員も多数が参加しました。4部それぞれがアイデアに富んだ作品を出品されていて、楽しむことができました。このコラボ展示は、回を重ねるごとに初回のメインテーマ「遊ぶ」が浸透してきているように思います。次回のコラボ展示が、さらに楽しみです。

第102回展を終えて

一般社団法人二科会デザイン部　理事長　今村 昭秀

100年を超える二科展の歴史は、そのまま日本の美術の歴史でもあると言え、そんな歴史や伝統のある二科展に現在のデザイン部が高等美術部として創設されたのは、67年前でしたので、デザイン部としては67回展になります。高等美術部のころは手描きのアナログ全盛でしたが、その後、社会、生活環境の変化、メディアの変容などにより、作品もコンピューターで制作して出力する作品が多くなり、今では手描きのアナログ表現の作品の方が新鮮で興味や関心をもって見られるようになっています。

デザイン部はビジュアルデザインアートを標榜しています。日常の機能主義的デザインとは異なる自己表現のアート的デザイン、デザイン的アート作品です。

SNSなどの情報空間がある今、誰でもいつでも自らがメディアになれて発信できる環境にありますが、展覧会場をメディアとする二科展は鑑賞したり、発信したりするだけではなく、出会いをつなぐつながりをもつメディアでもあります。

今年のデザイン部のテーマ部門は「持続可能な観光国際年」でした。このところこの持続可能というワードをよく目に耳にします。二科展は一過性のコンクール、コンペなどとは違う「持続性」こそが特徴であり、魅力でもあると思います。見ず知らずの人達がそれぞれ多様な価値と感性をもって出会うことで新たなコミュニケーション、クリエーションが生まれるのではないかと思います。

デザイン部はデジタル化社会であるからこそ、ネットでは手に入らない、ダイレクトコミュニケーションの「持続可能」な出会いの場でもありたいと思っています。

103回二科展 出品規約変更のご注意

〈会友・一般〉搬入点数が6点までとなりました。

・応募点数6点以内、号数組合せの規約、額装幅3㎝以内など、出品規約を熟読、確認し制作してください。

・規約制限を超えた作品は受付できません。審査対象外となります。

※詳細は二科会事務所にお問い合わせ下さい。

訃報

絵画部会員　勝野　浩一　氏

二〇一七年九月五日逝去　享年87歳

略歴

一九六八年　第53回展特選

一九七〇年　第55回展会友推挙

一九八一年　第66回展会員推挙

生へのおもい　S100

第95回記念展出品作

事務局だより

第102回二科展は、搬入点数こそ減少となったが、入場者数は増加傾向であった（表1・2・3）。特に外国人の有料入場者数増加が感じられたのは近年の国策が反映されての事であろうか。二科会では外国のお客様には英語版の案内パンフレットを配布し、各階受付では英語堪能スタッフが対応している。早見表やキャプション等の英語表記までは行き届かないが、コラボ展示会場に設けられた、作品が当たる抽選箱に、外国籍らしき沢山の応募が見られたのは嬉しく思えた。抽選で漏れた方で住所記入者には記念のポストカードをプレゼントしており、住所が海外の方にも届く事を願いながらコラボスタッフがエアメールを送った。

102回展の受賞者の中から選抜された2018春季二科展の選抜出品者は皆等しく130号迄の大作を出品出来るようになった。その年の受賞者は春季展選抜出品、帝国ホテル二科サロンの出品等、色々なチャレンジチャンスが与えられている。

今年の巡回展7会場の内、3会場は展示に半日しか費やせないハードな日程となっている。その1会場・富山→京都展は、衆院選の投開票日をも直撃した台風21号の影響で交通網が麻痺。作品トラックを待って3時間以内での展示作業。4部門の先生方等の二科パワーで展示完了そして退館。「良い展示が出来ました」との連絡に「良かった！」の安堵感。後日「塙さんの作品大きすぎてエレベータに乗らず2人の展示業者がかついで階段を上っています」との写真付きのコメントに、その日の状況を知っている私は何とも…申し訳ない…。「巡回展作品は130号以下」の根拠を垣間見た気がした。

東海支部の計らいで、体調を崩され、ここ七年程、二科展に出品出来ずにおられる名古屋の梅村孝之先生と田中理事長が東海展会場で再会する感動の一場面があった。お二人のさり気ない会話からこぼれ出るお話に、二科会の紡がれて来た歴史の一頁が感じられた。

二科会の事業は春秋の二科展と地方色豊かな巡回展から成る。二科展の裾野を広げて行くのは、人と人との信頼という絆と、日々の前向きな努力の積み重ねであると感じている。

事務局長　塙　珠世

■トピックス

初出品で二点入選・二科新人賞を受賞した上村咲弥さん（17・千葉）は、授賞式に高校生らしく制服で登場し、懇親会では「これからも出品を続けるかは、わかりませんが…」と、正直な若者らしい挨拶。各界で早熟な才を見せて活躍する10代が話題であるが、新しい感性とスキルで、気負わずに楽しむ若い世代が新鮮に登場している。

2018 春季二科展

平成30年4月17日～24日

東京都美術館

表1

	入場者（昨年比）
一般当日	5,465人　（881増）
前売り券入場	6,933人　（2,350増）
高校・大学	771人　（163増）
チラシ割引	635人　（28増）
チケットぴあ	148人　（12増）
団体割引	77人　（77増）
企画割引	88人　（132減）
新聞社優待券	2,404人　（146増）
有料入場者	16,521人　（3,525増）
無料入場者	74,979人　（2,612減）
入場者合計	91,500人　（913増）

表2

搬入点数	102回展（昨年比）
絵画・一般	2,570点（102減）
絵画・会友	1,077点　（8減）
彫刻・一般	49点　（11減）
彫刻・会友	33点　（4減）
合計	3,729点（125減）

表3　（102回コラボ展示を除く）

展示（遺作含む）	点数（昨年比）	人数（昨年比）	35才以下 出品者数（昨年比）	35才以下 応募・在籍数（昨年比）
絵画・一般	767点（13増）	705名（2増）	61名　（7減）	68名　（10減）
絵画・会友	331点（23減）	259名（±0）	7名　（±0）	9名　（1増）
絵画・会員	158点　（1増）	158名（1増）	－	－
彫刻・一般	44点　（4減）	43名（5減）	11名　（5減）	11名　（8減）
彫刻・会友	33点　（4減）	33名（3減）	4名　（1減）	4名　（2減）
彫刻・会員	58点　（1増）	49名（1増）	－	－
展示合計	1,391点（16減）	1,247名（4減）	83名（13減）	92名　（19減）

編集後記

◇表紙は、新美術館と掲示二科展ポスター、彫刻展示室の文部科学大臣賞・佐々木会員作品、雨に濡れた野外彫刻から望むコラボ展示室、広々としたU35展示会場を配した。

◇受賞作品を紹介してきた作品寸評は、受賞作品目録の充実もあり、今号は1～3階の研究会を担当した会員各氏に、範囲を区切り、数点をPICK UPして寸評頂いた。会友から一般出品者作品まで、どのような作品を選び評されるのか、新しい試みとした。

◇国立新美術館は今年、開館10周年を迎えた。同時に開催会場を移した新生二科展も10年を経た。上野・都美術館の会場を知らない出品者も増え、U35展示室の新鮮な作品が注目され、若い世代の受賞、推挙などの活躍の機会も多くなっている。紙面でも新しい風をお伝えしていきたい。（N）

カット　梅村孝之

平成二十九年十一月一日発行
公益社団法人　二科会
〒160－0022
東京都新宿区新宿4－3－15
レイフラット新宿　501号室
電話　03（3354）6466
FAX　03（3354）4768

編集委員
委員長（絵）野村　みそら
委員（絵）田川　絵理
〃　〃　尾崎　ゆき子
〃　〃　谷口　貞久
〃　（彫）廣瀬　友彦
〃　〃　宮澤　光造

★ 二科ニュースweb入稿用アドレス：newsnika@gmail.com